

浅井花子の人と作品

付：浅井花子著作目録

和田 崇

一 文壇デビューまで

浅井花子は、いわゆる「無名」の作家であり「忘れられた」作家である。試しにインターネットの検索エンジンで調べてみても、第一回芥川賞候補になったという程度のわずかな情報しかえられない。そうした情報の少ない一人の女性作家について、著作目録の作成とともに、その生涯の再現を試みたのが本稿である。

浅井花子についての唯一の評伝と言える『北海道文学大事典』収録の東野ひろ子「浅井花子」によると、浅井は一九〇三年（明治三十六年）に熊本県で生まれた。そのため、浅井の小説では、熊本で過ごした幼少期をモデルとしたと思われる描写がいくつも見られる。たとえば、「ちか子」『曠野大学』一九五六年十二月には、「失業者の六人目の末っ子として生まれ、古い城下町の

裏通りに育ち、小学校を出るとするに工場で働いた」とあり、「風見の鶏」『くま』一九五八年十二月）では、熊本市内の春竹町に住み、母親は六人の子どもを残して早くに亡くなり、小学校を卒業すると町で一番大きい印刷会社の文選見習工となったことが描かれている。そして、随筆「六月の心」『浮標』一九五三年八月）で記されたように、十七歳となった年の六月に、「メリンスの単衣に、一冊のノートと雑誌、僅かな旅費を懐に入れて」「放浪の第一歩を踏み出した」のだった。

随筆「エンジ色の春（日活篇）」『竹やぶ』一九五六年五月）によると、それから四年後、二十一歳となった浅井は、京都の大將軍にあつた「日活撮影所の第二部技芸員」となっていた。しかし、観客が抱く華やかなイメージとは裏腹の日活撮影所の「みじめで不安定なサラリーマンの生活」に幻滅する中で、「資本主義」という言葉に興味を持ち、本屋で「河上博士の資本論

解説、や赤い表紙のロシヤ革命史」などを買い求めた。加えて「プロレタリア文学の「二週間」「赤い恋」「女工哀史」を読んだことは、後の彼女の創作に影響を与えている。そして、「総同盟が分裂して評議会が生れた時、背景部、タイトル、大道具、ライト掛りの人たちの手で日活キネマ支部が組織され、評ぎ会の合同労働組合に加盟し」、浅井の家でひらかれた研究会には、国領伍一郎がたびたび参加していたようだ。

この京都時代に関する浅井の回想が事実であることは、『京都地方労働者教育運動史』によつて確認できる。同書には、一九二六年（大正十五年）一月十四日、京都の合同労働組合（日本労働組合評議会系）千本支部において、谷口善太郎、橋本寅太郎、浅井花子、前川好子らが研究会活動を盛んに行わなければならないことを強調したことや、同月十八日、京都の電気工組合（同評議会系）の第四支部において、浅井が「無産婦人運動」という題の発表を行ったことが記されている。二十代前半の浅井は、京都にいた。

一九二三年に起きた第一次共産党事件から二八年（昭和三年）の三・一五事件にかけて、激動の時期を京都で過ごした浅井は、「迫害されつゝある×員の妻より」（『戦旗』一九三〇年二月、婦人欄）において、夫が第一次共産党事件で検挙され、生まれたばかりの赤ん坊とともに飢えにさいなまれたりスパイに追われたりする中、それでもたくましく生き、同志獲得のために闘う決意を述べている。このように、貧困の中で革命運動のために闘

う婦人闘士の姿が、いくつかの資料で浮かび上がる浅井花子のイメージである。

そして、浅井は上京した。その時期は定かでないが、少なくとも一九三三年までには東京にいたと考えられる。それは、間宮茂輔が、自身が「検挙される（一九三三年の——引用者注）二ヶ月ぐらい前」の出来事として、浅井との出会いを回想しているからである。間宮は、アジトにきた「小柄なレポーター」⁽⁴⁾が火鉢の金網の上にあつた二つ三つの切餅を「ぺろっと平らげ、追加で出した三つ四つも「またたくひまに食べてしま」ったことに驚き、帰り際に彼女にまた「三つ四つ古新聞にくるんで渡した」ことを述懐している。その「小柄なレポーター」こそが浅井だった。後でわかったことだが、当時の彼女は欠食（何とも食はずに）三日目であり、飢えながらも組合活動が続けていたのである。

こうして、一九三三年以降の転向の時期に入り、組織が弱体化する中で、浅井は引き続き末端の成員として革命運動のために活動した。しかし、彼女はそこで運動内部のさまざまな矛盾と直面する。そして、その矛盾により生じたアイデンティティの揺らぎが、彼女に筆を執らせることになった。

二 プロレタリア文学派の有力新人

浅井の文壇デビュー作は詩であった。『婦人文芸』の

一九三五年四月号に掲載された「バスケット」には、貧しい生活の中、我が子へのお土産であるバスケットを抱きしめながら、同時に幾万の貧しい子供たちへもこのバスケットを行き渡らせたいと願う母の気持ちが描かれている。この詩は、『婦人文芸』同年六月号の「巻頭言」において、神近市子が絶賛し、「作品の社会化」の実践例として紹介された。

つづいて、同年五月号の『文学評論』に小説「ある夫婦」が発表された。前掲の東野ひろ子によると、同作品は「宮本百合子に励まされ」て発表したらしい。「ある夫婦」は、三・一五事件で検挙された夫が釈放された後、極貧の状況下にある夫婦と一人息子の三人家族の生活模様を、妻の弘子に焦点化して描いた作品である。飢餓にさいなまれるその日暮らしの生活の中で、革命運動に対する不信も湧き上りながら、弘子は理想と現実の狭間で葛藤するのであった。

また、六月号の『婦人文芸』には小説「泥濘の春」が発表された。同作品は、紙芝居を興業して生計を立てながら、貧民窟で暮らす千枝が主人公である。千枝には秋田という同志の恋人がいて子供も生まれたが、インテリで階級的に没落したこの男と別れ、現在は母子二人で生活している。そんな中、千枝が紙芝居で使う画の配給先にいる外村はかつての恋人と似たところがあり、彼女の中に異性ととの恋愛感覚が思い起こされてくる。しかし、外村の女性蔑視の態度や周囲の男たちの彼女に対する差別に憤ることで、千枝は「しっかりと心を武装して生きなければ

ならない」と思うのであった。

冒頭で挙げたように、浅井は石川達三が「蒼氓」で受賞した第一回芥川賞の候補となったが、その候補作が右の二つの小説であった。選考委員の川端康成は、「詫びる」(『文学評論』一九三五年五月)で同じく芥川賞候補となった渡邊寛とあわせて、「渡邊氏と浅井氏は労働者の中より新しく生れて来た。プロレタリア文学としてその素材にも作者の生活にも、よい感動が溢れ胸打たれた」と評している。つまり、浅井はプロレタリア文学派の有力な新人として文壇に迎え入れられたのである。

もちろん、一九三四年二月にプロレタリア作家同盟が解散して以降の作品に「プロレタリア文学」という呼称を与えることは、本来適切でないかもしれない。当時は、非合法で政治的任務を遂行する活動家のみならず、文化団体の関係者にまで検挙の手が及んでいた。国家権力による徹底した弾圧の下で萎縮した作家たちは、次第に政治的な主題を作品に描かなくなり、中には思想そのものを「転向」する作家も現れていた。しかし、この時期の浅井の作品の多くは、貧困と女性蔑視にさいなまれる中、退潮期の革命運動に婦人労働者がどのように参与するかを主題としている。そのため、転向期に新しい「プロレタリア作家」が誕生したと考えるでもないのか。川端の指摘と呼応するように「作者の生活」がプロレタリア文学の「素材」となった浅井の創作意欲は止まらず、『文学評論』と『婦人文芸』を中心に次々と作品を発表していった。

戦前に浅井が発表した創作は、確認できた範囲で詩が四篇、小説が七篇である。その中で最も注目を浴びたのは、一九三六年五月号と六月号の『文学評論』に連載された小説「地下道の春」であった。同作品は、労働運動に携わる婦人労働者の千代が主人公である。千代は、同じく運動に参加する安子とわびしい下駄屋の二階で共同生活をしており、彼女らとともに階級的落伍者との失恋を経験していた。潔癖なまでに運動を一義的なものとする千代は、インテリの山川に対して、恋愛を労働運動と切り離すのではなく、その仕事の一部としてお互いを政治的にも高め合う階級的恋愛を求めた。しかし、山川の通俗的な恋愛観の前に、二人の関係は破綻する。また、婦人部で街頭レポをする彼女は、レポの仕事を軽視する支部常任委の態度に反発し、工場に基礎を置いた生活をしたいと願い、同志の山形の紹介で小さな印刷工場に入ってしまった。

「地下道の春」は、浅井の生涯で最も多くの論評を受けた作品である。同時代評は著作目録に記載しないため、ここで「地下道の春」評の主たるものを列挙しておこう。

- ・青野季吉「文芸時評（6）」（『報知新聞』一九三六年五月三日）
- ・松田解子「山鏡」「地下道の春」連載小説」（『人民文庫』一九三六年六月）

- ・間宮茂輔「文芸時評 作品評を主として」（『文学評論』一九三六年六月）

- ・村山知義「文芸時評（二）」（『国民新聞』一九三六年六月十七日）
- ・徳永直「文芸時評」（『文学評論』一九三六年七月）
- ・金龍濟「地下道の春」について」（『文学評論』一九三六年七月）

評者がプロレタリア文学系の作家ばかりであることは言うまでもないが、にもかかわらず、その多くは作品の完成度に対して批判的なものばかりであった。たとえば、間宮や村山は、作者の主観性が煩わしいほど強いとし、描写に客観性がないことを指摘した。また、青野や徳永は、所々に穴が空きバラバラとなつていると、構成の曖昧さを指摘した。構成力の欠如は、後述するように戦後の浅井の作品に対しても指摘されていることであり、たしかに彼女の欠点である。しかし、それ以上に革命運動における恋愛や性役割など、内容が提起する問題について特筆すべきではなかったか。

この点に唯一触れたのは金龍濟である。金は「地下道の春」を「婦人闘士の愛情の問題をとり上げた力作」と評価している。だが一方で、作中の千代の態度が「思想や運動に対する態度（世界観や人生観）と人間性とを分離して二元的に考へてゐること——つまり愛情の問題を全階級生活の一部として考へないで、男女間の性生活をもつと奥深いものとしてゐるところに、非プロレタリア的な変態性をすら暴露してゐるのであり、「しかも、作者は彼女のプライドを非階級的な感傷的愛情（むしろ露骨な情欲）に引きずり込ませて、単なる女としての理解しが

たい屈服を非人間的な山川の前にさせようとしてゐるのではないだろうか」と批判した。この金の評には、組織崩壊前のプロレタリア文学運動で展開された公式主義の残滓が見え隠れする。結局、革命運動の一義性の前で恋愛は二義的ないしそれ以下であり、運動の全体性の中で個人は抹消されてしまう。また、「非階級的な感傷的愛情」を「単なる女としての理解しがたい屈服」として、階級観を無視した情動的な恋愛を「単なる女」がするものだと見ている点も見逃せない。感傷的な恋愛観は女の持つ性質であり、「男性」運動家のように冷静になることを求めているのである。

しかし、「地下道の春」には、金の公式主義的な批判だけでは把握できない重層的な問題が内包されている。それは、「ある夫婦」や「泥濘の春」と同じく、貧困や恋愛、それらと革命運動をどのように止揚するかという問題である。とりわけ性差の問題については、先の二作品よりも発展的に描かれていると言つてよいだろう。たとえば、「泥濘の春」の千枝は、紙芝居という男性ばかりの職場で女性が働くことで揶揄され差別を受けるというように、女性蔑視の描かれ方が単純であった。ところが千代の場合は、婦人は街頭レボをするべきという性役割を与えられながら、しかも、その仕事で男性幹部によつて軽視されるという二重の抑圧を受けている。結局、千代は工場労働者となることで男性たちと同等の役割を果たすことを企図するしかない。このことは、革命運動に内在する女性差別を露呈した

に留まらず、政治活動において女性が認められるためには、恋愛を捨て、出産も放棄し（「地下道の春」において、組合員同士の結婚の条件として産児制限をするべきと男性労働者が意見している）、過度に男性化することが求められるという問題にまで敷衍できるだろう。

ただし、「地下道の春」を全面的に評価することができないのもまた事実である。たとえば、金も指摘した「思想や運動」と「人間性」の関係については、浅井自身も旧来の階級的恋愛観を脱していない。そもそも、プロレタリア文学における「愛情の問題」は、すでに一九三一年頃に議論された問題であったが、その時話題となつた片岡鉄兵「愛情の問題」（『改造』一九三一年一月）や江馬修「きよ子の経験」（『ナツプ』一九三二年二月）など男性作家の諸作品では、通俗的な恋愛を求める人間は政治的にも没落し、組織の離反者となることが描かれていた。このような階級的落伍者の描かれ方は、浅井のいくつかの作品にも共通して見られ、基本的な構図はそのまま継承されている。また、転向期に革命運動と恋愛の関係を描くことに新奇性があつたかという点、そうでもない。政治運動における夫婦関係を主題としたものでは、佐多稲子の「くれなゐ」（『婦人公論』一九三六年一月）や『中央公論』一九三八年八月）や「山巖」（『中央公論』一九三六年五月）、あるいは平林たい子の「女の問題」（『改造』一九三五年十一月）や「その人と妻」（『中央公論』一九三六年三月）など、著名な女性作家も描いている。また、同志間の恋愛と友

情をテーマとした利根川ユリ「歩み」〔婦人文芸〕一九三六年五月

など、浅井と同じく無名の書き手も愛情の問題を描いた。

しかし、それでも浅井の作品を評価したいのは、革命運動に従順に参加し、作品の人物形象においても公式的な構図が見られながらも、感傷的な恋愛との葛藤や出産の問題、運動内部における性役割など、政治運動に参加する女性の内面の揺らぎを、当事者の視点で一貫して描いたからである。時系列を先んずれば、戦後に彼女が創作活動を再開した時にも同様のテーマが繰り返し描かれた。婦人闘士のアイデンティティに対する彼女のこだわりは、それだけ強かったのである。

他にも浅井は、後に小林多喜二の作品などとともに中国語に翻訳された小説「千人針」を一九三六年八月号の『労働雑誌』に、翌年四月には『文学界』に小説「古きもの」を発表するなど、精力的に執筆活動を続けた。しかし、三七年六月号の『婦人文芸』に、「作家訪問 浅井花子氏」と題して写真が掲載されて以降、戦前に彼女の著作は確認できない。この時、写真には次のような詩が付された。

はげしい風の日、雲は四散して、草木は非常時状態だ。

私は風の中に座つて、歴史の風雲を、胸一杯に感じてゐる。

ついに、彼女の身にも非常事態が訪れた。

三 北海道への逃避

文芸雑誌の誌面から姿を消した浅井は、北海道へ逃げていた。彼女は青森から函館に渡る船の中で「日支事変」勃発の新聞記事を見ており、先の「作家訪問」に写真が掲載された翌月、盧溝橋事件が勃発した一九三七年七月に北海道へ渡ったようである。ちなみに、前掲の東野ひろ子は、「社会運動非合法中、全協オルグ活動、流浪、投獄に逢いながら札幌に潜入、活動家蔵前光家と結婚」と記している。この時期の出来事については、随筆よりも小説で多く回想されているため、すべてを事実と受け止めるわけにはいかないが、小説の記述を参考に可能な限り再現したい。

浅井が結婚した蔵前光家は、社会運動関連の事典に人名項目があるほどの有名な運動家であった。たとえば、三一・一五事件で検挙され不起訴になった後には、神奈川県オルグだった田中清玄と交代して県委員会の責任者となっていた。⁽⁷⁾また、四・一六事件で検挙された後の公判の様子は、『特高月報』一九三〇年四月分に記載のほか、『東京朝日新聞』一九三〇年三月四日の記事では、「法廷内で革命歌を合唱乱舞」したことが伝えられている。

そんな光家と浅井が恋愛関係になり結婚したのは、一九四〇年頃と推定できる（「ちか子」前掲）。そもそも浅井は、光家と出会う以前に別の男性との間に子供をもうけたようであるが、そ

の子を残して北海道へ逃れていた。一方の光家も、大和サツシュ工場で争議が起こった際、警官や暴力団に対して体を張って仲間をかばう若い組合員の姿に同情し、社長夫人の座を捨てて争議団に合流した三浦ウメと結婚した過去があった。⁸⁾運動と恋愛の両面において、ともに凄絶な過去を持つ二人の恋愛は、戦後の浅井の作品によって、出合いの甘美さとその後の結婚生活の凡庸さとのコントラストを伴いながら、たびたび描かれることになる。

蔵前夫婦は結婚後、小樽に渡り、光家は昔の知人を頼って岸鉄工所の旋盤工となった(「ちか子」前掲)。ちなみに、倉本稔の小林多喜二伝には、多喜二の「転形期の人々」に登場する中嶋鉄工所のモデルとして、同名の鉄工所が紹介されている。⁹⁾中嶋鉄工所のモデルとなった「岸鉄工所」は、境一雄の友人の父親が経営していたため、小樽の労働組合は同鉄工所の部屋を借りて事務所にしていたようだ。この「岸鉄工所」と光家の勤め先が同じかは定かでないが、思想犯で何度も検挙歴のある光家を雇用した点において、同一の可能性はあると言えよう。

こうして、蔵前夫婦は小樽で新しい生活をスタートさせた。ところが、一九四一年十二月九日の早朝、光家は予防拘禁法によつて検挙され、四四年の末まで予防拘禁所に拘禁されてしまう。それまでに多くの時間を革命運動のために費やした夫婦には、安息の日々はなかなか訪れなかった。そして、四五年七月、終戦の一月前に光家は拘禁所から帰り、そのまま元の職場であ

る岸鉄工所の現場監督となった(「風見の鶏」前掲)。

四 戦後小樽の文化人

戦争が終わり、占領軍の支配下という条件つきではあるものの、ようやく浅井のような婦人運動家が自由に発言できる時代となった。それを象徴するように、戦後の新聞紙上で最初に彼女の名前を確認できるのは、一九四七年一月に『小樽新聞』に連載された「婦人団体代表者を囲む座談会」という記事である。この座談会をはじめ、彼女は小樽在住の文化人として、『小樽新聞』や『みなと新聞』、『夕刊北海タイムス』など、小樽で発行された新聞に多数の記事を執筆した。¹⁰⁾

記事の内容は多岐にわたるが、やはり婦人の政治参加に関するものが目につく。たとえば、一九四七年四月一日の『小樽新聞』に掲載された「現実のぬかるみから」では、戦後に広がった「デモクラシー」という言葉が形骸化し、古い空気が依然として残る中、婦人の政治に対する無関心を指摘し、関心を持つよう促そうとしている。また、四九年三月三十一日の『みなと新聞』に掲載された「四月の希望」では、四月十日の婦人デーによせて、日本の婦人運動の歴史やイブセンの『人形の家』の内容に触れながら、婦人が古い生き方を捨て新しい人生の一步を踏み出す必要性を訴えている。

この時期に書かれた記事の中で、浅井花子という女性作家の

一生を象徴するような随筆がある。それは、一九五〇年一月八日の『北海タイムス』に掲載された「新しい心」である。少し長いが重要な箇所を引用したい。

宗教と文学と、哲学と社会運動の思想の林をさまよひ、新しいモラル、新しい生活、新しい社会を求めながら、さて、私のその内容は、結局現実にはネ返されることでしかなかった、私にとって、いままでの現実はただ不合理で社会生活も家庭生活の空気も、自分の命を枯死させるようなものでしかなかった、何故か―それは私が女であることにつきる、

いままで女が女らしく生きることが、ゆるされたが、人間らしく生きることがゆるされなかった、女らしい寄生的な考え方を認められても人間的なモラルを追求することは非難された、

女が思想を持つ、何という大胆な―女は草花の様に弱く、すなおで強い力のかげに生きてゆくものときめられていたので、女の人間性、独立を主張する私の情熱はいつも水をかけられていた、

私の希む家庭は男女の自由な協力の具体化したものであるのに、人々はそれは家庭ではないと否定する、トゲのように私をとりかこんださまざまの否定、それはどこに根拠をもっていたらう、本来人間性の中にはない―封建的

な社会制度、社会ソシキ―社会思想の中に、それが意地悪く個人の生活内容にまでささつてきたのだった

「男女の自由な協力の具体化した」家庭を求めて、終戦後も彼女の煩悶は続いた。

五 同人雑誌と中央文壇

戦後、確認できた範囲で一九四七年から執筆を再開した浅井であったが、創作はしばらく発表しなかった。そして、戦後で最初に確認できる創作は、戦前の文壇デビューの時と同じく詩であった。

一九五二年九月に発行された『浮標』創刊号に「詩」とシンブルな表題が付され、埋草のように三段組の一番下に掲載された浅井の戦後最初の詩は、「芥川も死んだ 有島も死んだ 春月も死んだ」とあることから、昭和初期頃の心境をつづつたものだと考えられる。「手を振った 生きて見よう／美しい心で―秀れた精神で―」と結ばれたこの詩の最後は、執筆時の現在と結びつけることで、浅井という一人の女性のみならず、戦争をまたいで約二十年間を「生き」た日本人が「美しい心」でいられたかを問い直しているようにも感じられる。

つづいて、浅井の戦後最初の小説は、同じく『浮標』の三号（一九五二年十一月）に発表された「女見川市場」であった。小

樽市内にある妙見川市場の立ち退き問題をモデルとし、市場を牛耳る暴力団と市との関係に民主主義が形骸化していく様子をとらえ、同時に社会運動家である夫との微妙な距離感を感じさせる内容で、戦後の浅井の置かれた状況を形象化した意欲的な作品であったが、残念ながら未完に終わっている。同作品の記述を参考にすると、この頃、彼女は小樽の市会議員選挙に無所属で出馬し、その様子は新聞でも報じられたらしい。また、繰り返し引用している東野ひろ子は、浅井が「婦人有権者同盟」をつくり市議選に立候補したと記しているが、事実確認までではできなかった。いずれにせよ、浅井は小樽という北の小都市で起きるさまざまな社会問題に、戦後日本のデモクラシーの縮図を読み取り、それを小説で表現したのである。

一九五〇年代なかば頃の浅井は、前掲の『浮標』と、十三号（一九五四年八月）より作品を寄稿し始めた『竹やぶ』という、小樽で発行された二つの同人誌を中心に創作活動をしていた。五五年二月、『図書新聞』の招集で北海道代表として「地方文化を語る座談会」に参加した浅井の説明によると、小樽ペンクラブの機関誌『浮標』は、活版印刷で五百部を刷っており、同人数は発会時に八十名だったが、半年もたないうちに三百名となった。一方の『竹やぶ』は、小樽の労働組合運動で活躍している中小企業の労働者を中心に組織されていた。この二つの団体は対蹠的で、前者が市長や裁判長、市会議員といった市の有名人も参加するいわゆる「文学青年の集り」だったのに対し、

後者は、最初こそセクツト的傾向があったものの、広く労働組合の文化部員を中心に連結して、広汎な同人組織になったようである。⁽¹⁾浅井は、小樽の文化人グループと勤労者の文化運動の両方に参加し、それぞれの事情に精通していた。

こうして、戦時中の混乱期に北海道へ逃れ、小樽という安住の地を得て地方で創作を続けていた浅井であったが、再び中央文壇の雑誌に彼女の書いた小説が掲載された。その小説とは、一九五四年九月号の『新日本文学』に発表された「死」である。そもそも「死」は、同年一月に発行された『浮標』六号に先に発表され、佐多稻子の推薦により『新日本文学』へ転載された小説であった。内容は、夫の義弟の父が自殺し、その通夜に出席する夫婦と一人息子の三人家族の様子を、妻のかな子の視点で描いたものである。生前国鉄の職員だった故人は、小商人気質で銭勘定のことには敏感で、そんな彼の死に対して、かな子はあまり同情できなかった。そんな中、家の用事では金策をほとんどしない夫が、香典のために大金を借りてきたことにはかな子は苛立つ。さらに、喪服で身を包むかな子に対し、みずぼらしい格好で通夜に参列する夫と息子に、彼女は苛立ちを強めた。通夜を一通り終えて散歩に出た夫婦は、二人が戦前の治安維持法下で組織活動をしていた頃に出会ったことを思い出す。しかし、現在の苛立たいしい心をもたらず夫の性質が、出会った当初からすでに前兆があったことにはかな子は気づくのであった。一読して明らかのように、「かな子」は浅井花子を、「夫」は

蔵前光家をモデルとしている。浅井は『浮標』発表時に、管見の限りこれまで一度も使っていない「錢屋弘子」という筆名を用いており、その背景にはおそらく近親者への配慮があったのである。階級的自覚を持った運動家の生活感覚のなさに対し、彼女の抱く「男女の自由な協力の具体化した」家庭という理想が崩壊する様子が、この小説を通じて読み取れる。

社会運動と夫婦や家庭との関係を前景化したこの小説は、しかし、きわめて浅薄にしか読まれなかった。高見順は「文芸時評」において、「死」の発表と同月の『中央公論』に掲載された中本たか子の「壁にかかると画像」をあわせて紹介しながら、「闘士礼賛」のプロレタリア文学初期においては、「同志愛で結ばれた良人を、家庭の内側から妻がこれを「いやな奴」として書く」というようなことはなかった」とし、「不逞」な偶像破壊「が行われたことに興味を示しながら、『死』の「妻」は、「いやな奴」としての妻の姿が躍如としている。妻を、こういう風に「いやな奴」にしたのは、何か。同志愛で結ばれた夫婦のこういう崩壊は、どこから来ているのか」と、人間関係のみに終始し、夫婦崩壊をもたらした背景を描ききっていない点を指摘した。¹² 同じく高見は「創作合評」で、「プロレタリア運動というものは人間を高めてゆくと同時に」「あの戦争中に非転向で貫く強さというものには、ある意味では非常にいやなやつしかそれはできなかつたというものがあるし、またその非転向を貫くために自分の性格がかなりへんに歪められて行つたかもし

れない」と発言していること¹³から、彼が夫婦崩壊の背景として想定したのは、革命運動そのものであったことがわかる。また、花田清輝の「文芸時評」も、高見と似た観点から批判的にとらえており、中本たか子「壁にかかると画像」と壺井栄「花」を紹介した上で、『新日本文学』の浅井花子の『死』は、中本の作品と壺井の作品をマゼあわせて二でわつたようなもの」と評価した。¹⁴

高見と花田の両方の「文芸時評」に登場する中本たか子の「壁にかかると画像」は、中本と夫の蔵原惟人との夫婦生活をモデルにしたと見られる小説である。画家でありながらも絵の仕事の収入が少ない妻が、二人いる息子の世話と家事全般を行うのに対し、戦中に非転向を貫いて新時代の文化運動を指導する夫は全く家事をせず、時には妻に手をあげることもさへある封建的な態度を描いている。浅井の「死」とあわせて読めば、たしかに高見の言う「偶像破壊」と見えなくもない。遡れば、壺井栄の「妻の座」(『新日本文学』一九四七年八月〜四九年七月)で、壺井の妹と再婚後すぐに離婚した徳永直の封建的な態度が暴露的に描かれたことがあり、浅井と中本の小説もその延長線上でとらえられたのであろう。しかし、浅井の「死」は、そのタイトルが暗示するように、治安維持法下に死を回避した二つの生命が出会い、そして結局はその融合が遂げられなかつた葛藤を描いており、一方の中本の小説も、ただ運動家の封建性を暴露したのではなく、運動内部の分裂による夫の苦悩に妻が気づき、

夫も少しずつではあるが自分で家事を行うようになるなど、夫婦の融和が描かれている。高見のように革命運動そのものを悪因と見なすことは簡単だが、運動ありきの生活において、それを恋愛や夫婦関係とどのように止揚するかを模索した二つの作品の提起する問題を再考する必要があるだろう。

このように、五十年問題で日本共産党や新日本文学会が内部分裂をしていた時期に、中央文壇で浅井の小説はわずかに注目を浴び、そしてまた忘れ去られていった。以降、同人雑誌評を除いて、彼女の作品が全国紙に取り上げられることはなかった。

六「風見の鶏」から晩年へ

小説「死」の論評を、浅井はどのような思いで受け止めたのだろうか。残念ながら彼女がそれに対して言及した文章は一つも確認できていない。ただ一つ言えるのは、それ以降も作家・浅井花子は書き続けたという事実のみである。

ただし、「書き続けた」という言葉が表象するものは、文献を調査して浅井の著作が見つかったその数のみであって、彼女が何を思い、どのような生活状況で筆を執ったのか、それまでは再現できない。雑誌『竹やぶ』の同人の一人は、口減らしのため江差に住む友人へ息子を預け頑張っている蔵前夫婦をモデルにした詩を書いている。¹⁵ また、浅井の小説では、戦後になつて夫は鉄工所で設計を担当し、鋳物工場の工場長になったもの

の、工場長とは名ばかりで、中小企業で資金繰りが厳しく、夫婦の生活にも影響の出ている様子が描かれている（「風見の鶏」）。小説の記述に創作的付加があるとしても、蔵前夫婦の経済状況が決して豊かでなかったことは容易に推察できる。

こうした中小企業が置かれた現実と運動家夫婦の生活、小樽の町と日本社会の行く末、その中で揺らめく一人の女性の内面を総合して意欲的に描こうとしたのが、浅井の唯一にして最後の長編小説である「風見の鶏」であった。同作品は最初、一九五六年十二月の『浮標』十二号および翌年八月の十三号に発表された。初回の十二号掲載時に、小松伸六が「同人雑誌評」¹⁶でわずかに言及している。つづいて、五八年十二月に発行された同人雑誌『くま』一号に『浮標』掲載分と新たに書き足した分を加えて発表した。この加筆分には、浅井の熊本時代をモデルとした回想が含まれている。また、六五年三月に発行された『小樽文学』三号にも同名の小説が掲載されており、それまでになかった戦時中の回想が描かれ、これが最後に発表された続編となった。

「風見の鶏」は、『くま』掲載時に同人雑誌としては珍しい大長編として注目され、八木義徳と荒正人が高く評価し、その年の『北海道年鑑』にも記録された。¹⁸ ただし、荒が指摘しているように「終りの部分の主人公の少女時代の想い出は少し唐突な感じ」であり、戦前にも指摘された浅井の弱点である構成力の低さが露呈している。また、構成への配慮を欠くほど主人公の

感情の赴くままに現在から過去、過去から現在へと物語が展開することから、これも戦前に指摘された「主観性」の強さが表れている。しかし、その強い主観性こそが、この小説を躍動させているようにも思える。

同作品の意義は、その主観がとらえた、めまぐるしく転換する社会状況を描いた前半部に集約されている。内容を要約すると、一九五二年の小樽を舞台に、婦人運動家のサダ子を中心として物語は展開する。サダ子は夫と息子の三人暮らしで、夫の三吉は中小企業の鉄工所が所持する鋳物工場で工場長をしている。サンフランシスコ講和条約施行後の軍需で仕事が増える大企業とは裏腹に、中小企業には仕事がない。サダ子の運動家としての才能を認め自由な活動を促す夫に対し、彼女は普通の家庭、愛情に時折愛おしさを感じる。また、婦人解放をめぐっては、家庭をきりもりする庶民の立場から、アメリカニズムに彩られたプチブルフェミニストの女性解放論には反対の立場である。そんな中、破防法撤廃を意気込んで北海道巡業に来た劇団先駆座の小樽公演に際して、サダ子は責任者となることを求められた承するが、公演を鑑賞する態度とは思えない武装防衛をする青年たちを目にして、彼女は革命運動の矛盾を感じるのであった。

さて、このように大長編を書いた浅井も、最後の続編を発表した一九六五年には満年齢で六十二歳をむかえていた。そして晩年、彼女があり余る創作意欲を表現する方法として選んだの

は、短歌であった。

帯広の短歌雑誌『辛夷』に初めて浅井の名が登場するのは、一九六一年一月号の「新会員紹介」である。それによると、彼女は同誌の代表を務める野原水嶺の紹介で辛夷社へ入会したようだ。『辛夷』は、一九二九年八月から帯広神社で開かれていた「潮音」「新壘」帯広歌会を創刊の母体とし、二〇一六年現在も発行を継続している北海道を代表する短歌雑誌である。⁽¹⁹⁾短歌雑誌とは言っても比較的自由度が高く、浅井は短歌のみならず詩や随筆も盛んに寄稿していた。

「私の望む短歌」(『辛夷』一九六二年六月)と題する随筆で、「歌は作者の呼吸である」とし、「作者が何かを追求しようとする時の心の律動が、歌になった様な歌こそぞましいものである」と語った浅井は、自身の奥底から湧き上がる感情を率直に詠み、過去から現在まであらゆる自己の生を題材とした。その中には、「子の父帰らず」(六一年四月)のように、吹雪の中を息子と二人で過ごし、夫の帰らない寂しさを詠んだ歌や、「悲しき月」(同年九月)のように、月夜の情景とともに札幌の刑務所に通った日々の孤独を詠んだ歌など、戦時中の暗い時代を題材としたものもある。

浅井の詠んだ短歌のうち、同人によって評価された首をいくつか挙げてみよう。

わが焦点少しづゝずれていつしかに傍観と云う淋しさに

在り 「妻の眼」(一九六一年十二月)

骨もくだけひしと抱き合う抱擁の中に永遠と云うものは
なきか 「カチユシヤ」(一九六二年三月)

その夫が解剖されてあらむ時痴呆の妻が魚をむしるよ

「悲しきひと」(一九六三年四月)

ベトナムの若き母らよわれも又かく子を抱きて恐れしこ

とあり 「私の秋とベトナムの間」(一九六三年十一月)

部屋の中光るばかりに掃除しぬ窓に射しこむ陽にはげま
され 「雀」(一九六八年四月)

特に一番目の歌は、「自分を中心にして物事を解しえた若い時代、それが妻となり母となると家事に追われ又自分よりも夫や子供中心の毎日が過ぎられるように、そうしなければならぬ立場となつてゆく、作者はそれを淋しいとも、これで良いのだとも思い自分に云い聞かせている」という同人評の言葉どおり、「女」「妻」「母」の主体の揺らぎを定型律の中で巧みに表現していると言えよう。浅井は短歌でも「女」の在り方を表現し続けていた。

最後に、確認できた範囲で最後に掲載された短歌「老女彷徨」(一九六八年十二月)の中から、三首を引用して本稿の結びとしたい。

老人ホームに行くときめたる初雪のその朝 ひととは眠り

眠りで

電気製品光り冷たく褥しめけるアパートに老人の座なきは当然

「さよなら」と云う必要もなき如く眠り眠りてそのまゝに逝く

最後の短歌は、老人ホームに向かう老女の悲哀と、その先に待つ死の姿を予感して詠まれた。

注

(1) 東野ひろ子「浅井花子」(北海道文学館編『北海道文学大事典』北海道新聞社、一九八五年十月、一六頁)

(2) 渡部徹監修・石田良三郎著『京都地方労働者教育運動史』(京都勤労者学園、一九七九年三月、一一一―一二二頁)

(3) 間宮茂輔「作家同盟の周辺について」プロレタリア文学運動の回想『文化評論』一九六九年十二月

(4) レポーターとは、組合活動に関わる極秘文書を成員から成員へ伝達する係りで、主に婦人労働者とその役割を担わされた。

(5) 川端康成「選評」『文藝春秋』一九三五年九月、のち『芥川賞全集第一巻』(文藝春秋社、一九八二年二月)に収録。引用は後者の三三六頁による。

(6) 浅井花子筆(和田崇翻刻・注)「徳永直宛書簡」『徳永直の会会報』六六号、二〇一五年七月

(7) 栗木安延「蔵前光家」『近代日本社会運動史人物大事典2』日

外アンシエーツ、一九九七年一月、四五二頁)

(8) 同右。

(9) 倉田稔「小村多喜二の東京時代」『商学討究』五二巻二・三号、二〇〇一年十二月)

(10) 一九四二年、戦時中の新聞統制によって、小樽新聞社や北海タイムス社など北海道内の日刊新聞十一社が統合され、北海道新聞社となった。終戦後、『北海道新聞』はそのまま残ったが、『小樽新聞』や『夕刊北海タイムス』(大手の北海道新聞が朝刊であったためか当初は夕刊に限定)など、統合前の新聞各社も復刊した。そのような状況の中で、新北海新聞社が新たに誕生するも、やがて北海タイムスと合併し、この統合を嫌った編集関係者が小樽でタブロイド版の新聞を発行したのが『みなと新聞』であった。なお、一九四九年当時に小樽に支社があった新聞社は、『みなと小樽(開港五〇周年記念)』(みなと新聞社、一九四九年七月)に、社屋の写真と住所が掲載されている。

(11) これに木原直彦『北海道文学史 戦後編』(北海道新聞社、一九八二年四月)の記述を補足すると、『浮標』の創刊時の編集人は市江弥門、発行人は国松登で、一九五二年の春頃から「戸田正彦、光野英親、原田浩らの新聞記者グループ、「新浪漫」に拠っていた市江、潮陵高校教師の湊誠、小樽商大同人誌「サイフォン」の同人らが協議を重ね、会員百二十人、賛助会員三十人という大きな組織となって九月一日に中央ホテルで花々しく発会式が開かれた。また、『浮標』より半年遅い五三年四月に創刊した『竹やぶ』は、「佐々木宣太郎らの創作が載った「小樽文学」の流れ

をひく民主主義文学系の孔版サークル誌で、因藤莊助、佐藤冬児、木皿稔、高崎徹らが主なメンバーであった」(二〇〇頁)。

(12) 高見順「文芸時評 同志愛結婚の末路」『東京新聞』一九五四年八月三十一日夕刊)

(13) 高見順・八木義徳・佐多稲子「第八十九回創作合評(一九五四年八月)」『群像』一九五四年十月)

(14) 花田清輝「文芸時評 シラミつぶしに」『新日本文学』一九五四年十月)

(15) 斎藤克己「僕の太陽」『竹やぶ』十四号、一九五四年十月)

(16) 小松伸六「同人雑誌評 土着性こそ地方誌の特権―風土的な特異性をもつ北海道誌―」『日本読書新聞』一九五七年二月四日)

(17) 東野ひろ子「くま」『北海道文学大事典』前掲)によると、『くま』は全二冊発行され、一九五九年に発行された第二号には「風見の鶏」続編が掲載されたと記されている(四四八頁)が、確認できていない。

(18) 八木義徳「道内同人誌評 力と情熱の所産「風見の鶏」／「産卵制限」／「面白い」小説に不満」『北海タイムス』一九五九年二月八日)、荒正人「第二回道内同人雑誌秀作評 題材に鋭い特色」『北海道新聞』一九五九年七月十四日)、無署名「本道の文学」『一九六〇年版 北海道年鑑』(北海道新聞社、一九五九年十月、三二二頁)。なお、荒正人が担当した「道内同人雑誌評」は、「第一回道内同人雑誌推薦作評」として一九五八年十二月三十日付で発表され、和田謹吾と八重樫実、北海道新聞学芸部の三者によって選ばれ、第二回からは上・下半期の二回に分け、和田と学芸部

とで選んだ。(木原直彦『北海道文学史 戦後編』前掲、一四七頁)

(19) 渡辺洪「辛夷」『北海道文学大事典』前掲)

(20) 横尾幹男「十二月号感銘歌」『辛夷』一九六二年二月)